

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	66-0282
施設名	諏訪保育園
施設所在地	東京都八王子市諏訪町5番地
法人名	社会福祉法人 相友会

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「あれがほしい」乳幼児の欲求から始まる十人十色の探究活動

<テーマの設定理由>

諏訪保育園では、「自分が好き」「人が好き」「自然が好き」の3つの好きが育つように、子どもの主体性と民主的な関係を大切にしている。特に、作って遊ぼうや歌って遊ぼう、踊って遊ぼうなど表現活動の機会が多く、アトリエを中心とした造形表現活動などが盛んである。昨年度のすくわくプログラムでは、個々の表現や遊びをいいねだけで終わらせずに、イメージを膨らませていけるように保育者も環境を作っていくことで、子どもたちの遊びが繋がったり、ひろがったり、深まったりして、発展していくこと、乳幼児の欲求の先には、子どもたちが自ら創り出す姿があることが振り返りを通して分かった。子どもたちが試行錯誤しながら工夫する造形する姿は、まさに探究活動そのものであり、今年度もアトリエの素材の利用が盛んで、子どもたちから作りたいものの相談や、こういったものが欲しいという声が聞かれている。子どもたちの好奇心や探究心、創造する心をさらに高めるために、今年度も上記のテーマで取り組むこととした。

2. 活動スケジュール

◎週に1回講師（永濱茜氏）

9月・3月：職員研修（永濱茜氏）

1月：古楽コンサート

講師が毎週来園し、子どもたちの「これがほしい」「作ってみたい」という思いを出発点に、少人数で素材に触れながら探究的な制作活動を行った。絵の具や段ボール、木材、紙粘土、自然素材など様々な素材を用い、切る・貼る・描く・組み立てるなどの表現を通して、試行錯誤や工夫を重ねながら主体的に活動できるようにした。また、遊びや生活を彩るものについて、子ども同士や保育者、講師と相談しながら制作を進め、協力や関わりが自然に生まれる環境を整えた。継続して活動できるよう、素材や制作途中の作品を残し、いつでも続きを楽しめるよう工夫した。スケジュールは子どもの興味や関係性に応じて柔軟に展開した。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

講師などの人的環境とともに、アトリエを中心に、丸鋸で扱いやすい大きさに加工した木材や紙箱、段ボール、キャップの芯、紙コップ、紙粘土など、子どもが作りたいイメージにつなげやすい素材や材料を用意した。また、絵の具やクレヨン子どもが色を選びながら、自ら使いたい時に手に取りやすいよう配置を工夫し、主体的に表現できる環境を整えた。さらに、制作途中の作品を保管できる棚や作品を共有できる場所を設けることで、「続きをやってみよう」「もっと作りたい」という意欲や、他児の表現への興味につながるよう工夫した。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【具体的な実施内容】「固形絵の具づくり」「走る車づくり」「コロコロオリンピック2026」「絵の具遊び」「ゆびえのぐ」「紙粘土遊び」「つち粘土遊び」「クレヨンお絵描き」「草木染め」「こども劇場の装飾づくり」「掲示板づくり」「木材で遊ぶ」「鉛筆立てづくり」「カップケーキづくり」「ドーナツづくり」「お店をつくる(ダンボールハウス)」「草木染めでおたのしみランチ」「クレヨンバイキング」「窓を使った色と透ける遊び」「古楽コンサート」「合奏遊び」「お笑いライブ」等

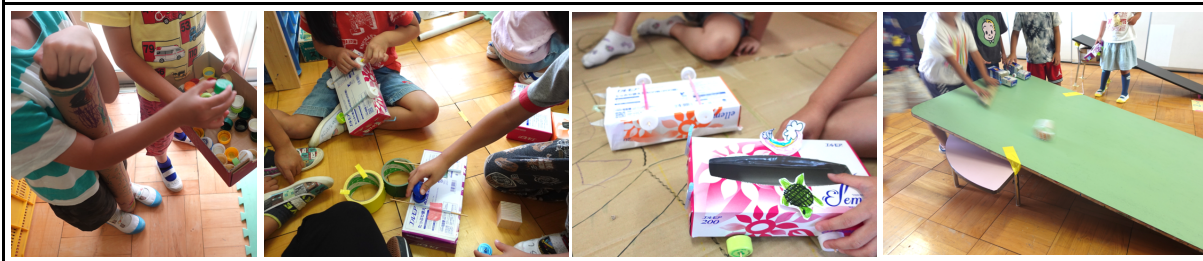
おしゃべりや素材と出会うきっかけをもとに“あれがほしい”“こんなふうにしたい”という探究心が深まるように活動を展開した。また、ひとりだけの興味関心に留まらない環境を作ったことで、“やってみよう”という意欲が広がり、共同的な活動に発展していった。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

いつものようにアトリエに素材を探しに来ていた5歳児クラスの■さんと■さんは、何かを探している様子であった。「キャップある?」「ここにあるよ」「見たけど、ナノモナイジンがいいんだよ」と話していたため、「ナノモナイジンって何?」と尋ねると、「これ」と言って、文字の書いていない無地のキャップを示してくれた。これまでもキャップを用いたバトルゲームを考案していたが、今回は車のタイヤにするようで、デザインや色を吟味しながら制作していた。その後、他の子どもたちも「もっと細い棒ある?」「ここに穴を開けて」と、自分の作りたい車をイメージしながら、それぞれに転がる車を制作していた。「昨年やったコロコロオリンピック、またやろうか」と声をかけると、「やる!」「かっこいい車作る!」と意欲的な姿が見られた。昨年転がる車を制作した経験があるため、保育者と対話しながら、一緒にイメージを持って取り組んでいた。

後日、コロコロオリンピックを開催した。「みて、面白いコロコロするんだよ!」「こっち(第1コース)は滑らないけど、こっち(第2コース)は滑るよ」と、作ったものだけでなく、転がり方や摩擦の違いを感じながら試している様子が多く見られた。5歳児だけでなく、2歳児、3歳児、4歳児も参加し、転がしたり覗き込んだり、互いに交代しながら転がるものを試したりしていた。

4歳児クラスの■さんは、赤い折り紙を丸めてテープで止めたコロコロを持ってきて、「作ったの」と会場に来てすぐに見せてくれた。「転がらない…」と、第3コースで転がらないことを残念そうに話していた。しかし、年長児の様子を見ながら何度も転がしたり、別のコースでも試したりする中で、「ここは転がった!」と、よく滑るコースで転がったことを嬉しそうに伝えていた。(8月25日講師記録)



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

すくわくの取り組みを通して、園の表現活動が「描かせる・作らせる」といった保育者主導の活動から、子どもの「やりたい」という思いを尊重し、その実現を支える方向へと変化してきたことを大きく感じた。子どもたちは日々の遊びに十分な時間を使えるようになり、作る・描くことへのハードルも下がったことで、「こうしたい」という思いを主体的に表現する姿が増えていった。また、すぐに要求を伝えるだけでなく、待ったり、工夫したりしながら活動を続ける中で、人との関わりや試行錯誤も含めた総合的な学びにつながっていた。子どもと保育者が対話を重ねながら環境を整えることで、遊びはその場限りで終わるのではなく、つながり、広がり、深まっていく姿が見られた。「やりたい」を実現できる環境があることで、「もっとこうしたい」と具体的なイメージを持ちながら主体的に表現する姿にもつながっていた。さらに、活動に直接参加するだけでなく、友達や保育者の姿を見ることも意欲につながっており、待つ時間や他者の表現に触れる時間も大切な経験であることを再認識した。保育者側にも意識の変化が生まれ、紙粘土や水彩など多様な素材環境を用意する機会が増えたことも大きい。素材との出会いそのものが子どもの表現意欲につながっていることを実感しており、今後も、子どもの表現を引き出す自由度の高い環境づくりを大切にしていきたい。